



「子育て」

公益財団法人神奈川県予防医学協会 集団検診センター所長 大崎逸朗

もう30年も前のことだ。子どもを持った時、情緒豊かな子に育ててほしいと思った。そこで、いくつかの育児書を手に取ってみた。なかなか「うん！」といわせるものがなかった。ある時、書店で、題名は忘れたが平井信義先生の書かれたものに出会った。そこにはこんなことが書かれていた。「子どもが何かいけない(?)ことをしたときに、大声を出して叱ることは勧められない。まして、あいまいな顔をして『ダメでしょ。』などというのは望ましくない。子どもにその真意は伝わらない。真剣に『お母さんそんなことをされたら悲しい!』と、母親が子どもに対して悲しい表情でこころから訴える。子どもはきっとハッとして母親を悲しませたことに気づいてくれる。子どもが何か壁に落書きをしたときに、『そこに描かれたら、お母さん困る。』と言って、小さな紙にこちらに書いてと言っても無理なことがある。代わりに大きな模造紙を張って『ここならいいよ。』と言って一緒にそこに自由に描いて子どもと楽しむ」。基調はそんな感じの内容だった。その文章の内容が科学的に正しいとか、実証されているとか別として、「うーん。そうなのかもしれないな。そうあったらいいな。」と思わずにいらなかった。そんな子育てをしたいと思った。

誰かの言葉に「子どもを育てると3歳になるまでに親は子どもからたくさんの感動、感激をあたえられる。それから先の子育ては子どもへの恩返しなのだ。」というものがあつた。初めて笑った時に感激し、寝返りやお座り、這い這い、立って歩いて、親が帰宅すると腕の中に飛び込んでという数々のシーンは忘れられない一コマコマだ。子どもと一緒に親は成長する。3人の子どものそれぞれが全く違う性格だった。私の持っていないものを持っていた。そして沢山のことを教えられた。子どもが育って行く時、子どもは親も育ててくれているのだとつくづく思った。

